

## 第195回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第4回通信句会) 開催

平成16年4月15日以来、これまで17年間に亘り、「元気に百歳」クラブ俳句サロン「道草」をご指導いただきました住田先生が、本年3月1日を以て、退任されることになりました。なかなか理解しない私たちに「伝統俳句とは何か」を、噛んで含めるように説いて下さいまして、本当に有難うございました。厚くお礼申し上げます。

この一年、「コロナ禍」のことを別にすれば、俳句サロン「道草」は、毎月変わらず開催されるものと思ひ込み、本年8月で200回目を迎える「道草」は、暗黙のうちにこれを区切りにした、第三冊目の「記念句集」を作成する予定にしていました。3月2日、急遽、有志のメンバーによるオンライン会議を実施し、当面は「全員参加の通信句会の開催」ということに決めて、句集の制作を目指すことにしました。

今回の通信句会に参加していただいた方々は、芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然の16名です。

オンライン会議では、第四回目の通信句会からは「兼題の提示」は、原晶如さんをお願いし、「投句のまとめから選句のまとめ」は、奥田和感さんをお願いすることにしました。お二方様にはお忙しいところを誠に恐縮千万ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。そして、3月通信句会の初スケジュールは、3月5日から3月18日までで、句会を開催することにし、本日を迎えました。晶如さん、和感さんには、まず第一回目、何かと慣れないことを押しつけましたが、よくここまでまとめていただき有難うございました。どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。

### 兼題1. 「朧月」「月朧」「朧月夜」

◎『朝まだきちぎり絵となる朧月』	明峰	天2
◎『寝静まる京の甍に月朧』	蒼樹	天1 ☆9
◎『白ワイン透かし揺らめく月朧』	栄女	天1
◎『お誘いを思いあぐねて月朧』	和感	天1
◎『百段の上に神をり朧月』	晶如	天1
◎『淡月におわす仏や浮御堂』	荻女	天1

### 兼題2. 「草餅」「蓬餅」「草の餅」「草団子」「母子餅」

◎『草餅の並ぶ朝市かもめ飛ぶ』	晶如	☆10
-----------------	----	-----

### 当季雑詠の自由題(=仲春=)

◎『草萌をやわらかく踏むスニーカー』	荻女	天3
◎『啓蟄やコロナの街の小賑わい』	傘吉	天2 ☆9
◎『語り部となりて伝へよ東北忌』	蒼樹	天2
◎『たつぷりとトースト厚く春蘭けり』	栄女	天1
◎『ふくらみて又膨らみて花咲けり』	憧岳	天1

兼題1. 「朧月」では、明峰さんの句「朝まだきちぎり絵となる朧月」が、天賞二つを獲得しました。「朝まだ明けきらない闇の中で、まるでちぎり絵のように朧な月だよね」という意の中に、朧月の危うさに託した一抹の寂しさが漂います。天賞に推挙したお二人の選者は、作者のTPOに応じた表現技術の巧みに、一票を投じました。次に蒼樹さんの句「寝静まる京の甍に月朧」が、天賞一つと最多得票賞(☆印)を獲得しました。京での旅宿、眠れぬ夜に窓から眺めた古都の甍が、淡い光に照らされており、ふっと見上げれ

ば月が朧に・・・という景が、目前に現れます。選者も推挙していますが、品の高い句になりました。次に栄女さんの句「白ワイン透かし揺らめく月朧」が、天賞一つを獲得しました。ただでさえ危うい朧月です。作者はその朧月を揺れる白ワインを瓶か、ワイングラスを通し、透かして眺めたようです。白ワインの好きな選者は、透けたその中で揺らめく月に一票を投じました。楽しく豊かな気持ちになりますね。

次に和感さんの句「お誘いを思いあぐねて月朧」が、天賞一つを獲得しました。この句は思いあぐねる自分の心と、朧月を重ね合わせた句ですが、天賞に推挙した選者は「甘酸っぱい乙女心の悩み」と、少しユーモラスな表現をされました。作者はニッコリなさっているのではないのでしょうか。更に晶如さんの句「百段の上に神をり朧月」が、天賞一つを獲得しました。朧月の夜、百段上って行けば神殿にお参りすることが出来る。黙々と石段を上る作者の信心の神々しさが、自然と顕れているようですね。選者の推挙の言葉に「朧月夜であるからこそいっそう神の存在を強く感じる」とあります。もう一句、荻女さんの句「淡月におおす仏や浮御堂」が、天賞一つを獲得しました。選者評にもありますが、琵琶湖の浮御堂、しかも朧月夜の浮御堂です。それと作者の仏心を重ねて一票を投じられました。琵琶湖の浮御堂の夜とは、静かに時の流れる春の夜であったでしょう。

兼題2. 「草餅」「草団子」では、晶如さんの句「草餅の並ぶ朝市かもめ飛ぶ」が、十票の高得票で、最多得票賞（☆印）を獲得しました。鷗の飛んでいる漁港の近い村の朝市の句なのでしょう。下五の「かもめ飛ぶ」が決めています。「珍しく草餅も並んでいるじゃない」というところでしょうか。選外では多佳さんの句「いまし摘みて色よく草の餅」が、比較的高得票を獲得しました。この句が私たち「道草」仲間の俳句研鑽を、ピシリと励ましているようで、背筋を伸ばしました。

自由題では、荻女さんの句「草萌を柔らかに踏むスニーカー」が、天賞三つを獲得しました。勢いのある春の草萌、スニーカーが、その緑を柔らかに優しく踏むというシーンです。まさに良く晴れた春の日を脳細胞が呼び出します。お三方の選者は、草萌の新しい新芽をスニーカーに、やさしく踏ませる作者の優しさを挙げておられました。

次に傘吉さんの句「啓蟄やコロナの街の小賑わい」が、天賞二つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。この句は季語の意味と街の様子が見事に対比できた句ではないでしょうか。人と虫の差こそあれ、下五の「小賑わい」は、春を迎えるに当たっての生物の気持というものでしょう。選者は作者の「小賑わい」にホロリと参りました。

もう一つ、蒼樹さんの句「語り部となりて伝へよ東北忌」も、天賞二つを獲得しました。この句は、まさに上五と中七の前半「語り部となりて」に、作者の気概を込めたものであり、3月11日のテレビでは、東北忌十年の感慨一入でありました。記憶から消してはなりません。

自由題では、さらに栄女さんの句「たつぷりとトースト厚く春闌けり」が、天賞一つを獲得しました。一言で言えば「春の朝の心豊かな朝餉」でしょうか。何せ平和で心豊かな朝です。選者には「厚いトーストの上に。塗られたバターまでたつぷり」と、堪能してきた春と重なるようです。評には「その分厚いトースト齧りついた想像まで付けて下さいました。もう一句、憧岳さんの句「ふくらみて又膨らみて花咲けり」が、天賞一つを獲得しました。この句を天賞に推挙された選者は、上五、中七の「ふくらみて又膨らみて」を、コロナ禍からの解放を待ち望む気持ちに対比されました。「花でさえ、その時を得れば、咲いてくるではないか」と。でも、やがて咲けるときまで、じっと待ちましょう。

今回は、住田先生ご退任のあとの第一回目の通信句会でありました。何かと不備は起こり得たと思います。こうした事態はお話を繰り返し、繰り返しして、円滑な通信句会に近づけたいと思います。今回の失敗は次回の句会に活かしていきましょう。では来月もよろしくお願いします。

白然（記）